

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
備	ヒ そなえる そなわる つぶさに 教5常①								杜家立成
									杜家立成
									杜家立成
									杜家立成
傍	ボウ かたからわ つくり 常①								王勃詩序
									王勃詩序
傾	ケイ かたむくか たむける 常①								王勃詩序
									王勃詩序
傑	ケツ すぐれる 常①								王勃詩序
									王勃詩序
債	サイ 常①								杜家立成
催	サイ もよおす うながす 常①								王勃詩序
									王勃詩序

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
備	備	備	備		備		備	備	備	備	備	備
	備	備	備		備		備	備	備	備	備	備
	備	備	備		備		備	備	備	備	備	備
	備	備	備		備		備	備	備	備	備	備
傍	傍	傍	傍	傍	傍		傍	傍	傍	傍	傍	傍
	傍	傍	傍	傍	傍		傍	傍	傍	傍	傍	傍
	傍	傍	傍	傍	傍		傍	傍	傍	傍	傍	傍
	傍	傍	傍	傍	傍		傍	傍	傍	傍	傍	傍
傾	傾	傾	傾	傾	傾		傾	傾	傾	傾	傾	傾
	傾	傾	傾	傾	傾		傾	傾	傾	傾	傾	傾
	傾	傾	傾	傾	傾		傾	傾	傾	傾	傾	傾
	傾	傾	傾	傾	傾		傾	傾	傾	傾	傾	傾
傑	傑	傑	傑	傑	傑		傑	傑	傑	傑	傑	傑
	傑	傑	傑	傑	傑		傑	傑	傑	傑	傑	傑
	傑	傑	傑	傑	傑		傑	傑	傑	傑	傑	傑
	傑	傑	傑	傑	傑		傑	傑	傑	傑	傑	傑
債	債	債	債	債	債		債	債	債	債	債	債
	債	債	債	債	債		債	債	債	債	債	債
	債	債	債	債	債		債	債	債	債	債	債
	債	債	債	債	債		債	債	債	債	債	債
催	催	催	催	催	催		催	催	催	催	催	催
	催	催	催	催	催		催	催	催	催	催	催
	催	催	催	催	催		催	催	催	催	催	催
	催	催	催	催	催		催	催	催	催	催	催

【備】旁を「夂+用」を書く異体字がある。「明治の漢字」に「夂+田」を書く例がある。現代中国では「イ」を省略して「夂+田」の字体を使っている。

【傍】干禄字書では「旁」と「傍」を〈通〉としている。五経文字では序文に「傍」を使っている。漱石は不思議な字体を

書いている。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
傷	ショウ いたむいた めず きず やぶる		傷	傷	傷	傷	傷	傷	傷
			傷	傷			傷	傷	傷
				傷			傷	傷	傷
僧	ソウ		僧			僧	僧	僧	僧
僧	人③						僧	僧	僧
働	ドウ はたらく								
働	教4常①								
働	後家 統消息往来								
働	教1常①								
働	人①								
働	ゴウ おごる あなどる あそぶ								
働	新②								
働	キョウ	働	働	働	働	働	働	働	働
働	①								
働	ゾウ かたち								
働	教5常①								
働									
働	ボク しもべ	僕	僕	僕	僕	僕	僕	僕	僕
働	常①								
働									
働									
働									

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
傷	傷	傷	傷	傷			傷	傷	傷	傷	傷	傷
												傷
												傷
僧	僧	僧	僧	僧	僧		僧	僧	僧	僧		僧
												僧
												僧
働	働	働	働	働	働		働	働	働	働		働
												働
												働
働	働	働	働	働	働		働	働	働	働		働
												働
												働
働	働	働	働	働	働		働	働	働	働		働
												働
												働
働	働	働	働	働	働		働	働	働	働		働
												働
												働
働	働	働	働	働	働		働	働	働	働		働
												働
												働

【傷】通(用)字体は正(統)字体よりも1画あるいは2画少ない。漱石は不思議な字体を書いている。
 【働】国字。中国では「働く」の意味に「動」を使う。
 【傲】2011年の新常用漢字。現代の日本と中国の字体は微妙に違う。弘道軒と現代中国の字体が同じ。

【僕】旁を「業」とする字体が多く書かれてきた。これを干禄字書では〈俗〉とし、「僕」を〈正〉とする。五経文字では「僕」を隸省とし、説文に従う字体を別に挙げている。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隷書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
僚	リョウ つかさ とも 常①		𠄎	僚			僚僚僚僚	僚僚僚僚	王勃詩序
億	オウ 教4常①	𠄎	億	億			億億億億	億億億億	聖武天皇雜集
儀	ギ のり 常①	𠄎	儀	儀儀儀儀			儀儀儀儀	儀儀儀儀	王勃詩序
僻	ヘキ ひがむ ①		僻	僻			僻僻僻僻	僻僻僻僻	瑠玉集
償	ショウ つくなう 常①	𠄎	償	償償償償			償償償償	償償償償	
儲	チョ もうけ たくわえ 人①		儲	儲			儲儲儲儲	儲儲儲儲	王勃詩序
優	ユウ すぐれる やさしい まさる ゆたか 教6常①		優	優優優優			優優優優	優優優優	饒魯指歸
允	イン じょう まことに 人①	允	允	允允允允			允允允允	允允允允	雅毛筆奉獻表

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
僚僚僚僚		僚僚僚僚					僚僚			僚僚		僚僚 北魏・寇謙書誌 現代中国
億億億億		億億億億					億億			億億		億 現代中国
儀儀儀儀		儀儀儀儀					儀儀儀儀			儀儀儀儀		儀 現代中国
僻僻僻僻		僻僻僻僻					僻僻			僻僻		僻 現代中国
償償償償		償償償償					償償償償			償償償償		償 現代中国
儲儲儲儲		儲儲儲儲					儲儲			儲儲		儲 現代中国
優優優優		優優優優					優優優優			優優優優		優 現代中国
允允允允		允允允允					允允			允允		允 現代中国

【億】西周の金文にはニンベンがない。九經字様では説文篆文に倣った字体を挙げ、「億」の字体を隷書としている。

【僻】干祿字書の序文と康熙字典の字体が一致しない。唐代の正字と清代の正字の字体が違うわけだ。

【償】「価」は「價」の省略字。手書きの用例が見つからない。

【儉】旁下部の「从」は漢代に「心」になっている。「儉」が書かれるのは江戸時代か。現代中国では草書の字体を書く。

【償】金文は『金文編』に掲載の例。ニンベンがない。それなら「賞」ではないかとも思うが、初文ということらしい。

【儲】康熙字典には人部の16画にある。

【允】古代の字体を見ると、上部は「以、目」に関係するよう
に思える。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
元	ゲン カシ も こうべ はじめ								元 元 元 元 元
兒	ケイ キョウ あに								元 元 元 元 元
兇	キョウ おそれる								兇 兇 兇 兇 兇
光	コウ ひかり ひかる								光 光 光 光 光
充	ジュウ あてる みたく みる								充 充 充 充 充

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
元	元	元	元	元			元	元	元	元	元	元
兒	兒	兒	兒	兒			兒	兒	兒	兒	兒	兒
兇	兇	兇	兇	兇			兇				兇	兇
光	光	光	光	光			光	光	光	光	光	光
充	充	充	充	充			充	充	充	充		充

【兇】古代の字体が多様。人の手のギザギザは何だろう。金文に櫛のようなものを加えた字があり、包山楚簡にもそれに似た字がある。

【兇】干禄字書では「兇」を〈通〉とし「凶」を〈正〉としている。現代中国でも「凶」を用いる。

【光】唐代の正字と清代の正字(康熙字典)の字体が異なる。

【充】咎なし点がつくことがある。